

逃げる ツチノコ

山本素石伝

丸尾聡

登場人物

山本素石 (ヤマモト ソセキ)

木野漫溪 (キノ マンケイ)

松岡枕流 (マツオカ チンリュウ)

岩魚山人 (イワナ サンジン)

河原岳童 (カワハラ ガクドウ)

紗恵

節子

ハナ

キク

秋邨 (しゅうそん) 先生

ほか狐や狸、魑魅魍魎、山の住人、軍人など

夜、深い山の中。二人の男がたき火にあたっている。酒を飲んでいゝ。何か待っていて闇に目を凝らしている。若き日の山本素石と秋邨先生である。二人はすでに少し酔っているようだ。素石は30になるかならぬか、秋邨先生は60を超えているだろうが、年齢不詳の体である。傍らに何やら箱。この箱から時々、ネズミの鳴き声とガサガサと動く音が聞こえてくる。そして、横にはネズミの天ぶらが並べられている。時で言えば終戦後、間もなくの頃。

秋邨 おい、山本君。もう九時を過ぎたぞ。そろそろ、やって来てもいい頃じゃないか。

素石 秋邨先生。なんやかんやいうて、待ちきれん様子ですな。

秋邨 ふん。龍神の温泉ではあの木こりの話、半分に聞いたが、君がここまでやるとはな。兜を脱ぐよ。

素石 山仕事している人たちは、思いもかけぬことを知っておりますな。あの炭焼き家業の木こりも、炭が売れない時は、この「ねず天」で大金を稼いだといっておりましたから。

秋邨 しかし、ねず天か。面白い。

箱が音を立てる。木こりが浮かぶ。

木こり そらあ、あの山から落ちる溪流には、アマゴもたくさんいるやいしょ。けど、尺物はどうかいのう。尺物が欲しけりや、狐か狸に持ってこさせるがよし。そらあ、わけはないやし。ネズミの天ぶらと引き換えにするのやよし。

秋邨 猫に鰹節、狐狸にネズミの天ぶらか。面白い。

素石 数が足りなきや、まだまだ用意しとりますから。

箱が音を立てる。

素石 先生、あんまり酔うたらいけませんわ。化かされんようにする

のが肝心です。

任せておけ。君がネズミの天ぷらの製造販売を企画立案して、ここまで作戦を遂行しとるのだから、狐狸の相手ぐらいいはしないといかん。たしか、こんなふうには追い返すんじゃない。「なんじゃ、こんな木の葉っぱなんかもってきやがって。こんなものが天下に通用すると思ってるやがるのか、バツカもーん！ 本物をもってこい、本物を。」

素石
そうすると日本銀行から本物の札束を持ってくるといふんですから。まあ、こちらは金やのうて、竹竿では手に負えん大アマゴを狐や狸に持ってこさせるちゅうんがミソですわ。

秋邨
しかし、やつらどうやって、そんな大物をとるんじゃないか。そりゃ、必死にとるんじゃないですか。いったんこのネズミの天ぷらのおいを嗅いだら、食べずにはおられなくなる、なんべん、追い返してもやってくるちゅうんですから。

木こり
まあ、気いつけんさいや。えらいべっぴんに化けて来たりするやよし。

狐の鳴き声が響いた。二人は気づいたか気づかぬか。二人、
おおあくび。

秋邨
不思議なもんやな。

素石
なんですか。

秋邨
たき火や。

素石
え。

秋邨
不思議なほどしみみするわ。

素石
そうですね。同じ煙でもなんで工場の煙突や乗り合いバスの排気ガスと違うんやろな。

秋邨
炎をじっと見ているとなんともいえん、遠くに置き忘れとるものを、心の底でじわじわと暖められているような気がするわ。

また、狐の声。二人は眠そうだ。

秋邨
・・・おい、きみ、寝ちゃいかんぞ。

素石 ……先生こそ。

ふたり、目を覚まそうとするが、やはり眠い。

秋邨 ……おい、山本君、山本素石君、きみ、まさか狸じゃないだろうな。

素石 ……は？ 先生こそ、本物にちがいはおへんやろな…。

寝入る二人。いつのまにか狐と狸、そのほか山の魑魅魍魎たちが現れた。皆、人間に化けているが、本性は丸見えである。

素石 (寝入りながら)……こんなものが天下に通用すると思ってや

がるのか、バツカもーん！ 本物をもってこい、本物を…。

やって来たものの中には、あのねず天の話をした男も交じっていたような。素石の言葉に、狐や狸たち驚くが、寝言だと知って安心して喜ぶ。そして、ネズミの天ぷらを手に取る。

秋邨 面白いわ。

秋邨だけが目を覚まし、誘われるように彼らの中に。残された素石を、よく見ると彼の生涯に携わった女性たちのようにも見える、狐が囿んだ。暗転。

1 溪流

釣り師が溪流で竿を出している。昭和39年。アマゴを狙っているのだ。釣り師、山本素石はもう40を過ぎている。もう一人の男は、木野漫溪。

素石 漫ちゃん。漫溪。

漫溪 (下流からやって来て) はい。

素石 もう少し上まで行こか。

漫溪 そうですな。(魚籠の中を見ながら) けど、もう十分や。

素石 おつつけみんなも宿に着く頃合いか。

漫溪 はい。でも、山本さん、もう少し上流まで行きたそうな顔して
ますな。

素石 そういふわけでもないんやが……。結構数あげたんやないか。
せっかくの会の発足に、一匹もつれなんだら格好つかんところで
したわ。

素石 ふーん、漫ちゃんも成長したやないか。魚をしめるちゅうたら、
ほんとにしめとった男が。

漫溪 もう、それを言わんといてください。

素石 釣れた岩魚が一匹残らず大口あけて、胴は指の形にへこんどっ
たからなあ。

漫溪 そやかて、しめよ、ちゅうたさかい、しめたんや。

素石 だれが、ほんまにしめいちゅうたんや。活きのいい間に頭を叩
いて即死させたらなあかんやんか。

漫溪 今は、わかってます。素石先生のおかげで。

素石 先生やめいや。先生ちやうで。

漫溪 わかってますけど、近頃は、随筆の方も頻繁に頼まれますのや
ろ。

素石 ああ、わしみたいのが書いたもんでも、掲載誌をくれるちゅう
んで投稿したんやが。まさか釣りの友誌に連載になるとは思わ
んかった。

素石 そや。

漫溪 なんですか。

素石 漫ちゃんの今の話書いたら。岩魚をほんまに絞めた話。

漫溪 ああ、やめてくれなはれ。山本さん、きっとまたあることない
ことむちゃくちゃ書きよりますのやろ。

素石 ええんじや、それで。

漫溪 会のこと面白く書きますのやろ。

素石 書くやろうな。

漫溪 元々、山本さんの随筆を読んでの会の発足ですから、仕方ない

わ。(懐から雑誌の切り抜きを取り出し)「突如、右手の山側から妙なものが飛んで来た。杉林の下生えは日陰の藪だたみで、林道から見ると、頭の高さぐらいが地表になっている。左の崖下は溪谷である。妙なものは、その日陰の藪だたみからとんできた。ヒューといったか、チーッとといったか、そのどちらともつかぬ音を立てて、下生えの藪の中からゆるい放物線を描いてとびかかってきたのは、一見したところ、ビール瓶のような格好をした蛇であった。」

素石　　・・・。さあ、行こうか。

漫溪　　はい。

二人戻りかけるが。

漫溪　　山本さん。

素石　　なんや。

漫溪　　で、結局、どうなったんですか。

素石　　何の話や。

漫溪　　昨日聞いたねず天の話ですわ。ほら、話の途中でもうなんや酔いがまわってしもうて・・・。で、最後の話をよう覚えてないんですわ。

素石　　化かされたんちゃうか。

漫溪　　え。

素石　　朝起きたらな、ネズミの天ぶらだけ、なくなってたわ。

漫溪　　大アマゴはなしですか。

素石　　なしや。

漫溪笑う。

素石　　おもしろいやろ。わけのわからんことは狐や狸のせいにしておくほうが世の中は楽しいのや。

漫溪　　はい。

二人行く。

とある山村の旅館。膳が並べられての宴席である。いつでも町の料亭のようなものではなく、どこか村の個人の家
のいろり端を解放したような趣がある。岩魚山人、河原岳
童、松岡枕流。人待ちの間のツチノコ談義である。旅館の
娘、キクが聞いている。

キク

岩魚の骨酒です。(と注ぐ) アマゴは、お連れさんが、釣って
くるいうから、それから焼くだ。おばあもおっつけ戻るだろうか
ら。それで、それからどうなったん。その蛇は。

枕流

そこがツチノコのツチノコたる所以なんや。魔性の蛇いうんか
な。

山人

か、神業や。スーと消えよる。

枕流

うむ。鈴鹿の山の炭焼きの竈のなかで発見されたツチノコは、
蛇とり専門の業者によって捕獲されたんやが、すぐに買い手が
ついて売られたらしい。

山人

いい、いい値段だったってな。

枕流

買い主は名古屋方面のへび商らしいんやが、どうしてもえさを
食わず、苦心の餌付けも拒み通して三月ほどで死んでもうたら
しいんや。

山人

そ、それ、か、感動したんや。

キク

はあ？

枕流

つまり、ツチノコの人間になつかぬ誇りたかき原始性にいたく
感動したちゅうわけや。

キク

はあ・・・

枕流

ともかく、話を聞いて、すぐにわれわれはその炭焼き小屋の主
を訪ねてみた。

キク

あんれ、まあ。

岳童 窯の主に聞けば、その後の消息が分かるかもしれないと思いました。

山人 ひよ、ひよっとして、剥製が瓶漬けになっとれば・・・
キク で、どうだったんだ。

枕流 残念ながら遅かったわ。炭焼きの窯の主は、年々炭が売れなくなつて、家族ぐるみで山を下りたらしい。

岳童 関東の方へ親戚を頼っていったということでしたが、結局行方はわかりませんでした。

山人 か、神業や。スーと消えよる。

キク あんたらよほどそのツチノコが好きなのか、よほど馬鹿なのか、どっちかだ。

山人 必ずいるんや、ツチノコは。

岳童 ツチノコ、ノヅチ、バチヘビ、五八寸、コヅチ、コロ、タンコロ、テンコロ、コロガリ、コロゲ、コロヘビ・・・。全国各地に様々な名前があるということが、この蛇の存在を如実に示していると言えないでしょうか。

キク そんなもんかや。

枕流 ツチノコを見た、それらしいものに出会った、こんなやつだった、こういう話は日本中にあるんや。

岳童 山本先生が目撃されたツチノコは、太さはビール瓶くらいで、やや平べったく、体長は40センチ。

キク ありや、そんな太短い蛇見たことねえで。

山人 そ、それが特徴だ、ツチノコの。けど、山で五十年暮らした人だって、見ねえ人もいる、ま、幻の蛇だから。

岳童 五八寸という呼び名は、太さが五寸、長さが八寸という意味です。とにかく太短い。

キク はあ。

岳童 それから、コロ、コロゲ、コロヘビなどという名前は、この蛇の習性を表しています。

キク どういうことかや。

岳童 転がるという奇妙な癖です。この蛇は、いつもではありませんが、転がって移動すると言われています。

山人　だ、だから、山であつたら、上の方へ逃げろ、逃げて下っっちゃならねえ、そ、そういわれている……。

枕流　この蛇にあたられたら、まずは到底助からない、猛毒の蛇ということや。普段は横にごろんごろんと転がるが、時には縦の輪になつて転がりながら追っかけてくるそうや。
お、おつかねえ。

と、そのとき、山本素石と木野漫溪がやってきた。

素石　遅うなりましたな。

枕流　会長が来ないと話にならんわ。

素石　だから、「会長」いうんはなあ。柄やないわ。幹事制の持ち回りでええやないか。

山人　だ、だめやて。

枕流　そうそう、この前の集まりで話したやないですか。会長の資格は、女房に愛想を尽かして逃げられた経験のあるものに限る。

キク　はあ？

素石　な、けつたいな資格やろ。

枕流　これから、釣りだけじゃなくて、ツチノコ探しまでやろいうんやから、家庭を顧みるような人であつてはならぬ、という趣旨ですわ。

素石　かなんなあ。

山人　キ、キクちゃんも気をつけな、いかに。

素石　こら、何を言う。けど、キクちゃんも大きゅうなつたなあ。お母さんの若い頃に似てべっぴんになるで。化かされんようにせんとこ。

岳童　その分だと釣果は上々のようですね。

素石　漫ちゃんは、ほんま腕を上げたわ。

漫溪　（キクに）アマゴ、台所の方へ置いてきたで。
キク　はい。

キク、行く。

素石　まあ、いつものようにだらだらとやればいいんやけど、今日は

枕流

会の正式な発足ということやから、まずは自己紹介といこうか。おお。

素石

討ち入りやないんやから。

枕流

では。松岡枕流こと松岡尚一。会社員。

岳童

会社員というのはいんじやないですか。

山人

そ、そや。わしらは釣りとツチノコの仲間やから。

枕流

では、改めて。松岡枕流、ツチノコ部長として、この、あれ？

岳童

会の名前はどうするんやったかな。

枕流

枕流さん、それは後で。

枕流

お、おお、後やな。ツチノコ部長として、家庭よりツチノコと

素石

自然の山河を愛することを宣言します。

山人

いよ、次期会長。

山人

い、岩魚山人こと坂井久光。ツチノコはおるんかおらんかでは

素石

なくて、ど、どこにおるのか、は、果たして捕まえられるか、

漫溪

ど、どうかや。

漫溪

その通りや。ええぞ、岩魚山人。

岳童

河原岳童こと河原進。一番の若輩者ではありませんが、どうぞよ

枕流

ろしくお願いいたします。

枕流

なんかいえ。

岳童

では。ツチノコは、トカゲ目の毒蛇に相当するもので、分化と

岳童

特殊化が極限まで進んで、次第に減少し、同類の少ないところ

岳童

から繁殖力も低減して、種族としての絶滅機が近づいているの

岳童

ではあるまいか。

山人

が、学者。

岳童

であるからしまして、ツチノコ探索には、科学的、生物学的な

岳童

意義が大いにあると考えます。

素石

意義なし。

漫溪

木野漫溪こと木野高行。枕流さんがいうた山河を愛するという

漫溪

ことやけど、やっぱり、天魚、岩魚、山女、など溪流釣りを愛

漫溪

し、溪流魚と呼ばれる日本在来の鱒の保護増殖に尽力を惜しま

漫溪

ないことと具体的な規約にしたらどうですやろ。

岳童

意義なし。

全員 異義なし。

素石 わしやな。山本素石こと山本幹二や。まず冠婚葬祭のルールやな。慶事弔事の際に会としてどうするかや。

岳童 なるほど必要ですね。

素石 一つ、お祝いは、女房に逃げられたときに限ること。

岳童 え。

枕流 それや。

素石 一つ、香典はツチノコにあたって討ち死にしたときに限る。

漫溪 ええぞ。

素石 一つ、見舞金は、ツチノコ探検で負傷したときに限ること。

山人 う、うん。

素石 この布告に異議を唱えるものは、異端の科により、むこう三ヶ月の謹慎を命じ、竿の使用を上下とも停止処分にする、ちゅうのはどや。

枕流 きつついわ。

素石 どっちの停止処分がきついんや。

枕流 上下ともですわ。

岳童 ようするに、この会は通俗的な冠婚葬祭なんかに関わり合うべきではない、ということですね。

素石 そや。

岳童 そんなことに使うなら、ツチノコ探索の費用にまわせと。

皆 異議なし。

素石 まあ、会則なんてものやない。そういう規約やらもうけてもな、どうせ、なし崩しになることが多いしな。心持ちやな、肝心なのは。だから、気の合うままに行き当たりばったりでええのやないか。さっき、皆が自己紹介のときに言うてたような口上が、まあ、いうてみれば申し合わせやな。

皆 うなづいた。

枕流 ところで会の名前はどうするんや。

素石 それはな、わしが考えて来た。

岳童 なんですか。

素石 ノータリンクラブ。

岳童 ノータリン・・・

枕流 クラブ・・・

山人 ロータリークラブに間違われんやろか。

素石 アホか。ロータリーと違って、ノータリンは立派な日本語や。

脳が足りないと書いて、ノータリンや。お互いの顔見てみや。

皆、顔を見合わせた。

枕流 たしかに・・・

山人 かしこそうやない・・・

岳童 そういうことですか。

漫溪 ノータリンクラブやなあ。

枕流 わし、女房に言われたわ。そういう蛇も珍しいかもしれんけど、

それを探そうとする、あんたの方が珍しいわ、ってな・・・

うん、ノータリンクラブ、ええやんか。

素石 それじゃ、会の名前は決まりとしてやな、ツチノコを捕まえる

方法を相談しとかなあかんと思うんや。

漫溪 それは重要ですわ。

素石 なにかええ知恵はおまへんか。

山人 ま、マムシより猛毒ちゅうことやから、た、叩き殺すのが確実

やないんか。

漫溪 しかしですな、そんな世にも珍しい動物を殺してしまうのは惜

しいと、僕は思いますねん。どんな手段を講じてでもええから、

生け捕り第一主義で通すのがええのとちやいますか。

それならば、金網で飼育して生態観察もできますしね。

う、うん。そらええ。ま、漫溪の言うとおりにや。が、岳童の言

うとおりにや。

漫溪 これ、みてくれはりますか。まだ試作の段階やけど。

漫溪、用意の品物を取り出す。大きなシャモジというか髪をとかすブラシ状の物に、みっちり釘が打ち付けられている。

漫溪 これですチノコが現れたらですな。まずはちっと押さえつけるわけですね、動けなくなったところを・・・

枕流 漫ちゃんよ、言うてることが違うやないか。こないに釘を打ち付けた物で抑えたら、ツチノコがあかんようになるやないか。そこが工夫ですわ。

山人 ど、どこがや。

漫溪 ほら、釘がほとんど隙間なく、打ち込まれてますやろ。これなら刺さることはありまへんから、表面をぴたっと押さえ込めすわ。

山人 ぴ、ぴたっとか。

漫溪 そうですわ。

山人 い、いいかもしれんなあ。

枕流 これ、なんでも言うんや。

漫溪 え？

枕流 なんか、こう名前があるやろ。ツチノコ捕獲なんたら、とか。ツチノコ抑え、いうんかなあ。

皆、口々に「ツチノコ抑え・・・」

素石 なんや、心躍らんなあ。

漫溪 ほしたら、考えときますわ。

枕流 今度はわしの番やな。これを見てくれや。

枕流、用意のピラを取り出す。そこには「手配書 幻の珍蛇 槌の子」などと書かれ、ツチノコの絵がある。

枕流 ツチノコ指名手配のピラやな。

山人 さ、さすが、ツチノコ部長や。

岳童 仕事がはやい。

枕流 仕事やないからはやいんやないか。

素石 遊びがはやい、ちゅうやつやな。この前、枕流がうちまで来て、ツチノコのモニタージュが必要やから書け、言うから書いてやったんや。

岳童 なんだ、枕流さん、ずいぶん早手回しだと思ったら、そういうことですか。(読んで)「手配書 幻の蛇 槌の子 右のもの住所不定、巧みに偽名を用い、正体つかみがたく、各地に出没の恐れあり。」

漫溪 「胴の太さ五寸、長さ八寸近く、よって五八寸の異名を持ち、行動きわめて敏捷なり、重要参考の者につき、速やかなる生け捕りを要す。」

枕流 このビラをとりあえずは三百枚。みんなで分担して、釣りに行くたんびに、山仕事をしている人たちに配って歩くのや。

素石 わしらは、毎日山へ出かけるわけにはいかんしな。
きよ、協力してくれるやろか。

山人 そうですよ。

漫溪 「賞金 生け捕り金十萬」

枕流 捕ってくれと頼むからには、何らかの見返りがなくてはならないから、これくらいは気張らんと。

山人 ビ、ビールを副賞でつけたら、どうやろ。

素石 そりや、ええな。ツチノコはビール瓶みたいだからちゅうことやな。そんなら、五八寸の名前もあることやし、生け捕ったら大瓶58本。遺体なら中瓶、写真なら小瓶にしとこか。
そりやええ。ビールは山じゃとれへんさかい、喜ぶわ。

お待たせしました、とキクの声。

キク おばあ帰って来たで。

旅館の主、ハナがやってくる。キクはいったん退場。

ハナ お待たせして申し訳ありません。お客さんになんのおかまいもせんと。

枕流 いやいやハナさん、キクちゃんが立派にやってくれとりましたわ。

素石 寄り合いやったそうすな。

ハナ へえ。いよいよ本決まりちゅうことな。

素石 そうでつか・・・

岳童 なにが本決まりなんですか。

枕流 おまえは、この村初めてやったなあ。

ハナ へえ、よくぞおいでくださいました。この村はなあ、ダムに沈

むんや。なくなってしまう。

え。

岳童 なあ、山本はん。

ハナ なんですやろ。

ハナ 山本さんが秋邨先生とよう来てた頃と比べてな、皆の顔が暗いんです。ダムのことと寄り合いがあると、賛成やら反対やら、補償のことやらな。

素石 (クラブの面々に) 秋邨先生とこの村に来てな、帯や着物に絵の書き付けをさせてもらってたんや。

ハナ 京都から絵描きさんが来たというて評判でした。ようやく戦争が終わって、洒落っ気が出たっていうんかの。

素石 タンスの底に戦争中は眠った、古着や無地の帯に絵を書くんや。せめてものおしゃれやったんやな。

ハナ はい。

素石 便利になりましたな。

ハナ はい。

素石 道も広うなったし。電気も通った。

ハナ はい。この村に電気が通ったんはな、昭和38年の8月、去年の夏のことでした。山で鹿が驚いてな、ピャー、ピャーと鳴きよった、明るかったんじゃろうな、ピャー、ピャー鳴きよったですよ。

漫溪 ほんま、明るかったんやろな。

素石 便利になって、不便は減ったけど、「気分」はようない、といううことはありますなあ。どこいったかて舗装にガードレールや。気分な。そうか、気分か。

ハナ みんな、ニコニコしとりましたな。あの頃は。

素石

ハナ
みんな、ニコニコしとりました。な。山仕事や畑仕事のと
ニコニコしとりました。

枕流
ムダなダム、下から読んでもムダなダムや。

ハナ
けれど、鉄砲の玉にあたらんだけましやと思つとります。
え。

ハナ
うちの父ちゃんは、お国の命令で戦争に行つて、今度はわたし
のところ召集令状が来たんですわ。お国の命令で、この村か
ら出て行けて。

キクが料理を持ってやつてくる。

キク
まあ、もう暗うなるのに電気もつけんと。

キク、電気をつけようとするが。

ハナ
キク、窓をな、あけてくれんか。

キク
え、でも、

ハナ
窓をな、あけてくれんか。

素石
キクちゃん。

キク
はい。

窓が開けられる。夕日が差し込む。

ハナ
あそこに木の大きゆうのが見えるじやろ。あの山の手前じや。
あの木にな、話しかけるんよ。お父ちゃんが帰ってくるまでと
思つてな。悲しいことや面白かったことや今日一日あったこと
をな、話しかけるんよ。……。あの木が沈んでもうたら、誰
に話しかけよ。

皆、ハナを見た。それから木を見た。

枕流
おつたらええなあ。

岳童
え。

枕流
こん山のどこかにな、ツチノコ。

ハナ
ツチノコとは、さてなんですかいの。

岳童
これです。(と手配書を渡す)

ハナ はあ、ヨコヅチですな。

山人 し、し、

枕流 知ってますのか。

ハナ あんまりたくさんはおらんようですけどな、この辺りじゃ昔からヨコヅチいうてます。

キク わたし、知らんよ。

ハナ あれはな、わさびを採りにいった時じゃった。ほら、あの木の向こうの山じゃ。一服して弁当使っとったらな、すぐ近くに、なんか黒いもんがコロコロと出てきよった。こんな太い短い奴じゃ。そいつがの、あっちへコロコロ、こっちへコロコロ、転がっておった。

岳童 これは重大証言ですよ。

ハナ ああ、あっちへコロコロ、こっちへコロコロ、遊んどった。半日ばかりな。どこにも行かなんだ。

素石 どこにも行かなんだ、か。

山人 い、いるんや。あ、あの山の向こうに。

漫溪 感無量やるな。

山人 え。

漫溪 ツチノコに遇うたら。

山人 う、うん。

枕流 よっしゃ、ノータリクラブの第一回ツチノコ探索は、あの山に決まりや。

キク あの山の向こうなら、そんなわけのわからん蛇じゃなくて、わたしは東京に行きたい。10月10日は東京オリンピックの開会式や。夢みたい。楽しいやろな、東京。

素石 ま、わしらはノータリンやからな。

岳童 あの、言いそびれて話す機会を失ってしまいました。京都大学の今西錦司教授も大変興味を持たれて、ぜひ倶楽部に入会したいと電報を打ってこられました。どうしましょう。

枕流 あないな偉い人に参加されたらかなわんな、うるそうて。

岳童 結構はなせる先生ですよ。

山人 そ、そうや、今西先生の伝で、その京都大学の、れ、リーダー

やらなんやら借りられんですかいのう？

岳童

ああ、なるほど。ツチノコの居所を突き止めるんですね。

素石

戦争やないんやから。

岳童

え。

素石

やっぱり「ツチノコおさえ」ぐらいがちょうどええやろ。戦争

やないんやから。

ハナ

山本はんもいきはったんやったなあ。戦争。

素石

はい。

ハナ

よかったなあ、無事帰れて。

素石

はい。

ハナ

さあ、今日はたくさん食べてって。

素石

・・・。

素石深々と一礼した。ハナ、キク去る。皆しばらく夕日を

見つめた。

素石

感無量やろうな・・・。

暗転。

3 戦争

爆撃音。銃声。突撃の声。太平洋戦争。素石は、レイテ作戦に参加していた。やがて玉音放送。

軍人

馬鹿者。山本、貴様は独立歩兵第523大隊において、十三人

を預かる決死的挺身奇襲兵団の分隊長ではないのか。

素石

はっ。大隊長殿、そうでありました。

軍人

それで、ありましたか？ ありましたとはどういうことか。

素石

誠に無念ながら、日本は負けたであります。

軍人

馬鹿者。今、気をつけい、恐れ多くも陛下がどんなお気持ちで

あられるか、その胸中をおもんばかれば、軍事教練の命令に背き、気をつけい、陛下の赤子である兵に、近隣農家の畑仕事の

素石
軍人
素石

手伝いをさせるとはなにごとであるか。
はっ、食料の自給が、これからの急務になると考えまして、
山本、歯を食いしばれ。
はっ。

山本、殴られる。

4 愛人宅

ここは、素石の愛人である紗恵の家の一室。昭和27年8月。素石がうなされている。紗恵入って来て、団扇で素石をあおぐ。素石、目覚める。

紗恵

また、夢を見ていたんですか。

素石

うなされてたか。

紗恵

ええ。

素石

そうか・・・

紗恵

アイスクャンデー食べはりますか？

素石

ああ。買って来てくれたんか。

紗恵

素石さん、好きですから。

紗恵、アイスクャンデーを素石に渡す。素石食べる。

紗恵

(笑う)

素石

なんや。

紗恵

ほんとおいしそうに食べるなあ、と思ったの。

素石

うちじゃ、よう食わんからな。

紗恵

それはまたどうしてですの。

素石

女房の前じゃ、なんや、恥ずかしい。

紗恵

まあ、私の前では恥ずかしくないのね。

素石

ああ、恥ずかしくないわ。

紗恵

嫌な人。

素石　　なんでや。

紗恵　　最初の奥さんの前では？

素石　　甘い物なんてあったんかなあ。祝言かてな、軍服にモンペでし
みったれたもんやった。

紗恵　　あの時は、皆そうでしたなあ。

素石　　アホやな。

紗恵　　え。

素石　　ようやく、戦争が終わった思うたら、まだ軍事教練やるいうて
な。アホかちゆうて、部下を農家の手伝いにいかせたら、伍長
に降格や。ポツダム降格されたのはわしくらいやで。

紗恵　　はいはい、何度もお聞きしました。

素石　　けったくそわるいわ。

紗恵　　無事に帰れたんですから。

素石　　・・・そやな。それやのに、あいつは終戦の次の年に肺結
核で死んだんやから、可哀想やった。

と、素石アイスクャンディの最後の一口をほうばった。

紗恵　　おいくつでしたっけ。

素石　　享年二十三やった。

紗恵　　その人が私に似てるの。

素石　　ああ。

紗恵　　嫌な人。

素石　　今の女房は、親戚筋の女や。子ども、小さかったしな・・・、

紗恵　　わたしは、ご迷惑をおかけするつもりはありませんから。

素石　　紗恵、おまえは不思議な女や。なんで、こんなわしと一緒にい
てくれるんや。

紗恵　　恋というのは賭けやと思いませんか。

素石　　賭け。

紗恵　　自分を好きな男に賭ける、賭けた以上は、どうなっても構わな
い、女の夢なんて、しれてますからね。

素石　　俺には、夢なんかないよ。ボヤーと生きてるだけだ。戦争が終
わって7年か。ただ生きとるだけや。

紗恵

見ちゃあいられない。

素石

え。

紗恵

ほんとは、夢がありすぎて、やりたいことがありすぎて、困つてくるせに。山でも川でも好きのところへ行けばいいのよ。思い切つて崩れてご覧なさいよ。いくつになつても崩れっぱなしじゃ困るけど、あなたは芯が崩れていないから大丈夫。ねえ、そうしなさいよ。釣りでも山登りでも、しばらく、ほうけてごらんなさい。きっといろいろなものが見えてくる。それで、行きと帰りに、ここに寄つて、わたしに話してちょうだい。あなたの見て来たこと、感じたこと。景色や色、匂い。不思議な出来事、小さな感傷や感慨を。

素石

紗恵。おまえはなんちゅう女や。

紗恵

今のうちですよ。男の人は。

素石

紗恵。

紗恵

それにしても、素石さんは、お山がお好きですね。

素石

ああ、京都に出る前は元々山育ちやから。

紗恵

故郷を思い出すんですか。

素石

それもある。あるけれど・・・この向こうはどうなっている

んや、気になって仕方ないんや。

紗恵

へえ。

素石

溪流を上りながら、アマゴや岩魚やヤマメを釣っていく。

紗恵

お魚が釣れるのが楽しんですな。

素石

そりゃ楽しい。毛鉤で釣るテンカラ釣りは、遊びや。いたずら

や。

紗恵

いたずら？

素石

人間が考えたからくりやろ。魚の餌に見立てた偽えさのからくり。

魚がひっかかったら「してやったり」ちゅうところや。え

さ釣りには、このいたずらの面白さがないんや。まじめすぎる。

まじめはつまらん。

紗恵

まじめだと機嫌が悪くなるなんて、ほんとうに素石さんは面白い。

い。もっとお話ししてください。

素石

溪流を竿を出しながら、上へ上へ上流へと登っていく。そうす

紗恵

素石

るとな、どんどん奥へ奥へ登っていきたくなる。そういうもんですか。

谷川ちゅうのは、だいたい曲がりくねっているやろ。上の方の見通しはきかない。それから、岩が邪魔をし、木が邪魔をし、滝が邪魔をして・・・、この向こうはどうなっているんや、好奇心やな。呼ばれるような気がするんや。向こうへ向こうへ奥へ奥へ。

紗恵

素石

なにあるんですか。

秋邨先生と山に入ったときのことやった。あれは福知山盆地から三国峠を超えて、一番奥の在所、灰野いうたかな、そこで一通り、帯の絵付けやら注文を受けて、一段落したら釣りや。灰野から、また上流へ上りながら竿を出していたんや。そしたらな、流れて来た。

紗恵

素石

なんですの。

茶碗。

紗恵

ええ？

素石

誰も住んでる人がおらんはずの上流から茶碗が流れて来たんや。

紗恵

まあ。

素石

秋邨生成は、平家の落人村があるんやないかといっていた・・・

紗恵

なあ、山の彼方かとか川の上流とか、何となく憧れるやないか。入らずの山、帰らずの谷。ねえ、やっぱり、あなたはそういうものをたくさん見てくるといいのよ。お金のことならなんとかしてあげる。

素石

山に住み着きよって帰ってこんかもしれんぞ。

紗恵

嘘。

素石

え。

紗恵

あなたは、きっと帰ってくる。そういうお役目なもの。

素石

なんや。

紗恵

それで町に住んでいる私に話をしてくれなきや。

素石

正直言うとな、ほっとするんや。

紗恵

へえ。

素石

山に入って日が沈む時分、帰り道を急ぐと、黄昏時で、ようや

紗恵

くおりて来た村里は夕餉の煙が立ち、障子に明かりが射して人影が映る。ほっとして「ああ、帰り着いた」
で、しばらくするとまたうずうずと山に出かけるのね、街にいられなくなつて。その繰り返し。

素石

おまえはようわかつてるなあ。

紗恵

はい。

素石

街じゃなきや生きられへん、でも、街だけでも生きづらい。わがままやな。

紗恵

はい。

素石

おまえ、まさか、狐か狸じゃないだろうな、

紗恵

さあ、どうですやろ。そうかもしれまへんな。でも、化かされるのも悪いものではないかもしれせんよ。

素石

そうか、そやなあ。

紗恵

いつてらっしゃい。

素石

そしたら、行ってくるか。

紗恵

へえ。それで、いつでもお帰りなさいまし。

素石、山を想う。

5 ツチノコ探索出発

ノータリクラブが、それぞれいかめしい探検隊の格好に身を包み、工夫を凝らしたツチノコ捕獲の道具を持っている。幟をかかげているものもいる。幟には「ノータリクラブここに在り」「ツチノコ御用」などと書かれている。

枕流

あつたあつたのニュースや。

一同

おう。

枕流

場所は近鉄の富田林から千早赤阪村へ通じる街道沿いの丘陵地帯。今は、大阪で開かれる万博の工事のためにブルドーザーが丘を削り、土を運んでる。そのブルにツチノコがひき殺されたそうや。

一同 おお。

岳童 その後の調査によりますと、そのツチノコは、ブルドーザーのキヤタピラにより、まるでスルメのようになってあえない最期を遂げたそうです。

山人 し、死体はどうしたんや。

岳童 工事現場の誰かが珍しいと貰い受けたらしいが、その後は行方不明。

山人 ま、また消えたんか。

漫溪 しかし、そしたらその辺りにツチノコ生存の可能性大いに在り、ちゅうことですな。

枕流 そうや、生物は一匹だけでは生きられへん。ノータリンクラブでは、一帯を大々的に探査、搜索することとする。

一同 おう。

素石登場。

素石 諸君。今日、ツチノコ部長は、奥さんと水盃を交わして来たんやぞ。覚悟はええな。今回の第12回ツチノコ捕獲作戦は、誰かの女房が逃げ出すまで続けるから、そのつもりでがんばれ。

山人 お、俺、もう休暇があらへんのや、どないしよう。

素石 欠勤せい。

漫溪 釣りの方で休みを取りすぎるからいかんのや。ツチノコのために休んだらんかい。

山人 そやかて、うちの社長、ごてごて言いよるのや。

素石 何いうとるねん。お前の会社の一つや二つつぶれたかて、日本の経済には波及しやへん。

皆 うん。

枕流 ツチノコと会社とどっちをとるんや。

山人 つ、ツチノコ。

漫溪 それでこそ、名誉あるノータリンクラブの会員や。

枕流 わしかてな、女房に出てけ、いうて来たんや。わしのこと、ツチノコ気違い言うから、腹が立ってな、出てけ、いうてしもう

たんや・・・(涙ぐむ)

素石

泣くな。おっさん。ええか、会社でなんぼがんばったかて、せいぜい部長どまりや。しかし、ツチノコを発見捕獲すれば、記念碑は建つわ、銅像は建つわ、そりゃえらいことやで。

山人

の、ノーベル賞もんや。

素石

そや、ノーベル賞・・・、やのうてノールス賞や。

一同

おう。

岳童

(タモを掲げて) 腕がなります。太いナイロンを寄り合わせこしらえたこの網、深さはなんと一メートル。これでツチノコを。(ととらえる仕草)

枕流

(五本針のヤスをかかげ) こっちは、鍛冶屋に頼んでこしらえた特製五本針や。

漫溪

あかん。ツチノコは生きて捕まえな。そんなやつたら死んでまう。

枕流

・・・非常用や。

漫溪

そしたら、やっぱりこれやな。ツチノコおさえ。これで身動きできんようになるで。

素石

わしらは、流行のゲバ棒じゃなく、タモ、ヤスにツチノコおさえじゃな。ええぞ。

山人

(袋を掲げ) み、味噌五キロ、スルメ30枚、か、髪の毛、さ、散髪屋からじゃ。

岳童

蛇の仲間は、毛髪が焼ける匂いが好きだと言われていますし、昔から、京都の北山では、「山でスルメを焼くとマムシが出る」と言われています。味噌も同様。

素石

それからこれや。(と箱を) 今回は長期戦やから、大胆な罠作戦をとってみたらええんやないかと思う。このなかの、鶏のひなには尊い犠牲になってもらうんや。ひなの足には石鯛用の丈夫な釣り針が仕込んである。ピアノ線で周りの木につなぎ止めておけば、罠を飲み込んだツチノコは、逃げられんようになるという寸法や。

一同

おお。

素石

(金属製の円筒を持ち) とらえたツチノコは、こいつに入れる。金属製やから逃げ出すことはないやろ。

一同　おう。
素石　さあ、出発や。ノールス賞目指して、各員一層奮励努力せよ。
一同　おう。

一同出発した。

6　ツチノコ探索

山。谷間。ツチノコがいそうではある。「火をつけるぞ」「まずはスルメや」などの声が聞こえる。やがて煙。その煙に巻かれながら転がるように、山人、素石、漫溪。山人はスルメをくわえている。

漫溪　た、たまらんわ。
山人　あ、あかん。
素石　こりや火葬場の匂いやな。
山人　あ、ああ、火葬場だ。
漫溪　なにをくわえとんのや。
山人　あ、味見や。

向こうから声。枕流の「おー、出よったぞ」

素石　なに。ツチが出よったか。
枕流　（向こうから）出よったあ。
漫溪　行きましょう。

三人行く。しばらくして煙に巻かれ、咳き込みながら、素石、漫溪、山人、枕流、岳童。

枕流　な、出よったやろ。
漫溪　枕流はん、出よったいうてもツチやないやないですか。
岳童　しかし、10匹や20匹じゃないですよ。アオダイショウやヤ

山人
素石

マカガシ、あんなに・・・
に、二メートル近いのもおった、おったで。
よっしや。これでスルメと髪の毛と味噌を焼いた匂いには、蛇
をおびき出す神通力があることが証明されたんや。

岳童

そうです。

枕流

そうや。

山人

うん。

漫溪

ツチも出るかもしれませんな。

素石

そや、わしらの狙いは、太短い幻の蛇やで。さあ、残りの分も
全部燃やすんや。

山人

ツ、ツチノコ出よれ。

一同

おう。

皆、突撃した。

誰もいなくなった舞台にツチノコの幻が浮かぶ。続いて、
狐狸たち、山の魑魅魍魎。

7 山の夜

ツチノコ探しの探検のある夜。満天の星。今日の泊まり場
所は、廃屋となった民家の一部屋。外へ小用を足しにいっ
た素石。室内では、クラブの面々が談笑し酒を酌み交わし
ている。

素石

おう。よう星が出とる。明日もツチノコ日和やなあ。

素石、メモを取り出し、書き付ける。

素石

・・・三種の沈香によるツチノコおびき出し作戦は、今日のと
ころは日の目を見なかった。かわりにとってはなんだが、村
の嵐弥助という老人からツチノコ目撃談を聞くことができた。
「昼の弁当を食べての、やっといっぶくしてから、又仕事に取り
かかったわな。そしたら、すぐ近いところに、何か黒いもん
がコロコロと出てきよった。うん、つい、そこところや。一

目見て、ヨコヅツちゅうことがわかったでや・・・

秋邨先生が浮かぶ。どうやら先生は死んでから狐や狸と仲間良くなったらしい。彼らと一緒にいる。

秋邨 うらやましいのう。素石、いつまでも遊んどって。

素石 ・・・・秋邨先生。はい。ツチノコ、面白いと思いまへんか。

秋邨 おもしろいもん、見つけたなあ。わしも生きとったら、一枚噛んどったのに。悔しなあ。

素石 かなんこといいなさる。

秋邨 ええか、素石、わけのわからんことが残った方がええのや。

素石 それが面白いんや。

素石 はい。おもしろがってますわ。

秋邨消えた。部屋から声。かなり皆は酒が入っているようだ。

枕流 会長、どこへ行ってましたのや。

素石 おお、すまんすまん、しょんべんくらいさせたってや。

素石、部屋に戻った。

枕流 まったく会長がいなんだら、どうしようもないわ。ったく・・・

素石 (漫溪に) 漫ちゃん、こいつ酔うとるんか。

枕流 ああ、会いたい会いたいツチノコ会いたい・・・

漫溪 枕流さん。まあ、アマゴでもやりなはれ。おお、わしが釣った尺物がまだ残っとるわ。

山人 よう釣ったのう。ここらあたりでも、もうこんな大きいんは珍しい。や、弥助さんがいうてた。

枕流 漫ちゃん、漫溪、何をいうてるのや。ツチノコ探索は空振りに終わったちゅうのに、何を呑気に魚を釣っとるんや。

漫溪 ノータリクラブは溪流釣りを愛好するものの集まりでっせ。ツチノコ探しの合間合間に、釣り糸を垂れるのがええんやないですか。

枕流 ええよ、ええよお、けどな・・・

岳童

ほら、枕硫さん、わたしが摘んで来たコゴミもありますから。このクルミ和えはいけます。

枕流

三億円事件の犯人がつかまらんのも無理ないなあー。

山人

ど、どうということや。

枕流

そやからな、捕まらんからちゅうてな、それはホシがおらんちゅうことやないわけや。

山人

は、はあ。

枕流

そやろ、事件は起きたわけや。

岳童

ツチノコと三億円事件が関係ありますか。

枕流

わからんやっちゃなあ。弥助老人の話かて聞いたやろ。他にもぎょうさん、ツチノコを見たりとらまえた話はあるんじや。山本さん筆頭にな、そうですね、会長。

素石

ああ。

枕流

ほいなのに、見つからんちゅうことや。これは、ホシがおらんちゅうことと違うで。ただ、見つからんちゅうだけのことや。

素石

そや、さすがツチノコ部長、うまいこといったなあ。だから、な、おっちゃん、嘆くのは早すぎるで。

岳童

なるほど、探し方がまずいのか隠れ方が上手いのか。

山人

あ、明日は、ひ、ひなを使つての囮、せ、戦術や。

素石

そやで。

枕流

わしが言いたいののはじや、

素石

なんや。

枕流

今日の、煙作戦で、穴の中で煙に巻かれて死んだツチノコがおるんじやないかということや。シヨック死してたらどうするんや。

山人

ど、どうするんや・・・

枕流

かわいそうやあ。(と泣く)

漫溪

あかん、酔うてるわ。

枕流

かわいそうやあ。

皆、笑った。

漫溪

ま、とにかく、この先、ツチノコ探しがどこまで空振りに終わ

つても、歴代の警察庁長官初め、空振り仲間は大勢おるちゆうことやな。

その通りやな。

素石
枕流

(半ば寝込みながら)・・・空振り嫌やねん。

と、狐の鳴き声。皆には聞こえたか聞こえないか。

岳童

そういえば、ここは、あの秋邨先生とネズミの天ぷらで、狐や狸に大アマゴを持ってこさせようとした場所の近くじゃないですか。

素石

そんで出よったんか。秋邨先生。

岳童

え。

山人

き、狐やら、た、狸やら、もうあまりおらんやろ。

岳童

じゃあ、化けて出てくることもないですね。

素石

しかし、おったら出るでえ。そや。狸が、人の家をな、訪ねるときに何というか知っとりますか。

岳童

な、なんというか、ですか・・・

素石

そうや。夜に人の家を訪ねたらな、普通は、こんばんわー、いうやろ。

岳童

ええ。

素石

狸はな、違うんや。

岳童

どう違うんです。

素石

狸はな、

と外から「コンマンワー」の声。驚く皆、素石は少し笑っているか。もう一度「コンマンワー」。

素石

出よったで。夜の山でおきることは、なんでも怪談になる種をはらんでるもんや。

「コンマンワー」響く。

舞台にはいつのまにか素石と秋邨先生。

素石

あれは、ちょうどこんな廃屋に、秋邨先生と泊まったときのこ
とや。夜更けに聞こえる。空耳かと思うたが、確かに聞こえる
んや。

横になっている二人の耳に「コンマンワー」。皆はいつの
まにか消えている。

秋邨

こらー、今、行くぞ。こういうてやるとな、しばらくはおとな
しいはずじゃ。(と寝る)

少し立つとまた「コンマンワー」

秋邨

(ガバと起き上がり)こらー、今、行くぞ。

また、しばらく黙るが、やがて、さっきより激しく「コン
マンワー、コンマンワー」。どうやら二匹が秋邨先生に負
けじとしているようだ。

秋邨

こりや埒があかん。山本君、握り飯があつたろう。あれに塩を
たっぷりかけて持ってこい。

素石

はい。

素石が握り飯を持ってくる。素石と秋邨が隠れていると、
たまらなくなったのかおずおずと狸の親子がやって来た。
秋邨、素石素早く二匹を捕まえた。

素石

こりや早速狸汁にしましよ。

秋邨

まあ、待て。どうやら親子のようやな。

狸、しきりにうなづき、何かを訴えかける。

秋邨

なになに。近頃は、めっきり雑木林も少なくなり、山は丸裸、
住むところにさえ苦労している、山から追い出されたら行くと
ころもありません。そりや可哀想やな。

狸、また必死にうなづく。

秋邨

だが、ええか。きさまら畜生の分際で人間様をからかうとは何事じゃ。こんなことは二度とせんいうなら、今日のところは狸汁は勘弁してやる。どうなんや。

狸、必死に頭を振って謝る。

秋邨

あやまつとる。(素石に) おもしろいやろ。(たぬきに) さあ、もう行け。握り飯持って、行け。

狸、「アリ、カドー」 二人笑う。

秋邨

おもしろいなあ。

素石

コンマンワー、アリ、カドー。(と笑う)

秋邨

素石、世の中にはな、わけのわからんことが残ったほう面白いんやで。

素石笑った。暗転。

小鳥の鳴き声、早朝。翌朝なのか。朝もやの中、漫溪と岳童が溪流に竿を出している。

岳童

昨日は参りましたね。怪談話が始まって。

漫溪

岳童。あのへんはやな、素石さんの十八番や。

岳童

どおりで悦に入っていた。僕は、もうちよっと上に行って竿を出してきます。

漫溪

おお。囀のひなの見回りは、一時間に一度やで。

岳童

わかってますよ。それまでに戻ります。

岳童行った。

漫溪

不思議やなあ。魚どもは落ち葉の下の深い淵にいるくせに、どうしてこんな小さい毛鉤がみえるんやろ。驚くわ。

遠くから「オーイ」の声。

漫溪

誰やろ。まだ交代の時間やなし。

また遠くから「オーイ」の声。

漫溪

オーイ。

「おるかー」

漫溪

(川面に目を凝らし、釣りに夢中になりながら呟くように) おるぞ。おー、おるぞ。なんぼでもおるわあ。

「行こかあー」

漫溪

おー、来い来い。・・・誰や枕流はんか素石さんか・・・

漫溪が言い終わらぬうちに、鐘と太鼓が鳴り響き始め、何千何万の「わっしょい、わっしょい、それ行けわっしょい」中には、コンマンワーの声も交じていたか。そして、雪崩のように、地響きをたてて、天狗やら、物の怪やら狐やら、狸やらの大群が現れ、通り過ぎた。漫溪、キモをつぶすが、

岳童

どうかしましたか。

いつの間にか岳童。

漫溪

ふ、不思議やあ。驚いたわあ。

二人去る。

夜、岩魚山人が釣りをしていたのだろう、帰りが遅くなっ
たようだ。

山人

た、大量じゃ。よ、よう、つ、釣れたわ。

コーンと鳴く声。鮮やかな縞模様の着物をまとった女がい
る。狐目であるとなおよい。

山人

で、出た・・・。

女

もし、もし、そこのお方・・・、もし、そこのお方。

山人 よーし。(と捕まえる決意をして) あ、ああ。あんたはいつたいどなたですかいな。

女 わたしは、この先の村の祭りに呼ばれて来たものですが、ここまで来たら急におなががちくちくちくちくと・・・、
そ、それはいかん。こんな場所では夜露にぬれる。さあ、俺の宿まで、連れて行ってあげよう。いい薬もある。さあ、手を。

と、女の腕をむんずとつかんだ。

女 あれ、あーれー。

山人 さあさあ。

女 乱暴は、乱暴おやめになってくださいまし。

山人 よいからよいから、歩くのだ。

山人、魚の魚籠やら何やら置いたまま歩き始めた。しばらくくと、

女 どうか手を緩めてくださいまし。どうか、お願いでございます。ならんならん。

女 では、せめて、腕を持ち替えてくださいまし。

山人 ならんならん。(とさらに腕をねじり上げた)

女 痛い、痛い、あなたのようなご立派な殿方のなされることとは思えません。

山人 立派か。

女 はい。ほんにご立派な方で。

山人 それならば腕を持ち替えてやろう。

女 はい。

山人 さあ、行くぞ。さあさあさあさあ。

山人、皆のいる宿までやって来た。

山人 おーい、き、狐を、つ、捕まえたぞ。狐だ。み、みんな出てこい！

皆が飛び出して来た。山人は、必死に女狐を押しさえ込んで

いる。

枕流　こら、山人、しっかりせい。
山人　え。

山人がつかんでいたのは、割木であった。

山人　わー、き、狐が木に化けた。
枕流　あほう。やられたんや。だまされたんや。
山人　え。あ、あー、手持ちかえたときや。だまされた。
素石　山人、魚籠やら竿やらはどうしたんや。
山人　あー、狐と遇うた場所に置いて来た。
素石　狙いは、それやったんやな。

ひときわ高く、コーンという声。
暗転。雨が降りはじめた。明かりがつくと、皆は部屋にいた。

素石　これはひどい雨やなあ。夕方はあれほど晴れとったのに。こんな調子で一晩中かいな。
枕流　囀のヒナが心配やな。
山人　あ、あした早うにいかなきゃ。
漫溪　そやな。

皆、激しい雨音がする天井を見上げている。岳童が帰ってくる。

岳童　あ、あの・・・
漫溪　どうしたんや。
岳童　晴れてます。外。
漫溪　そんなアホな。
岳童　よく晴れてますよ。星が出て。

顔を見合わせて、雨戸を開ける。と、たしかに満天の星。
枕流　これはおかしいで。

漫溪

確かにひどい降りやったのに。

皆、首を傾げながら部屋に戻った。

素石

こりや、狸の仕業やないか。

枕流

そや。丹波の鶴が丘で聞いた話やけど、狸の「砂まくり」ちゅうてな、しっぽで砂をあおり立てて、屋根にばらまきよるそや。

岳童

それにしても、あんなすごい音がするもんでしょうか。第一、外に砂らしきものなんかなかったし。

漫溪

だからな、そういうてしまおうとおもろ・・・

と、また雨。素石が目配せして、漫溪を誘った。二人が、そうっと動き、一斉に雨戸をあけ、皆も一緒に外に飛び出した。ただただ満天の星。いつのまにか雨音も聞こえず。皆、立ち尽くした。

素石

・・・漫ちゃん。

漫溪

へえ。

素石

続きを言うてええか。

漫溪

へえ。

素石

そういてしまおうとおもしろくないんや。どうせわけのわからんことは、狸か狐のせいにもしておくほうが、世の中は楽しいのや。ツチノコもずっと楽しければええなあ。

男たちが、星明かりに飲み込まれていく。

9

ヒナ哀歌

雨。本物の雨である。二人の男が山道に浮かんだ。

枕流

漫ちゃん、急げ。

漫溪

殺生な。枕流はんがなかなか起きんから、わしが残ったのに。

枕流 不覚やった。遅うに本当に降り始めてたんやなあ。

漫溪 そうだっせ。大雨に叩かれた上に、朝方の冷え込みや。

枕流 ツチノコのえさになることもままならんと死んでもうたんやな

いか。あのヒナども。

漫溪 さ、いきまひよ。山人と山本さんと岳童は、もう仕掛けた場所に着いとる頃や。

枕流 なあ、あいつらが死んどったら・・・

漫溪 なんですよん。

枕流 かわいそうやあ。

漫溪 まだ酔ってるんでっか。さあ、いきまひよ。

二人先を急いだ。

雨はあがりそうだ。素石、岳童、山人がいる。ここはひよこの囷を仕掛けた萱場である。立ち尽くしている3人。漫溪と素石がやってきた。

枕流 どうでっか。

素石 おお、枕流、漫ちゃん、来たか。

山人 あ、あかんかった。皆、死んどった。

漫溪 ツチノコは？

岳童が首を振る。

枕流 水浸しになって寒かったやろうなあ・・・おい、囷よ、いやひよこよ。夜になったら狐やイタチどもが来るからなあ。こわくても辛抱するんやぞ。上手くツチノコのえさになってくれたら、盛大なノータリンクラブ葬をしてやるからなあ。しっかりがんばれや・・・そういうたっただのになあ。

山人 囷なんか、つ、使わん方がよかったんやろか。

岳童 そんなことはないですよ。そんなことはないと・・・自分は思います。

素石 平気で殺生するくせに、小さな命があわれやと思う。やっぱし、

わしは芯のない人間なんやろか。

皆、素石を見た。

山人

だ、だれでも、そ、そやないか。

枕流

ほんでも、釣り師の胸の中は、他の人よりも矛盾しとるわ。．．．
だから釣りよるんかな。

素石

哀れというより愚かなことやな。

漫溪

山本さん。それでも、可哀想なのはこいつら違いますか。懇ろに葬ってやらんと。

山人

火葬して、焼き鳥にして食うてやる。

素石

そうやな。お玉串を奉納するちゅうんでもなし。歌でもうたお

枕流

え。

素石

「狭霧消ゆる 湊江の 船に白し 朝の霜

ただ水鳥の 声はして いまだ覚めず 岸の家」

皆、場違いな感じがして一瞬驚くが、やがて了解しヒナを

追悼した。皆も唄いだした。「冬景色」

嵐吹きて 雲は落ち 時雨（しぐれ）降りて 日は暮れぬ

若し燈火（ともしび）の 漏れ来ずば

それと分かじ 野辺の里

と、山からの帰りを告げるような夕焼け、いつのまにか。

素石

しまいやな。今回のツチノコは。帰るか。

皆、家路に着いた。

京都、素石の本宅。素石の二人目の奥さん、再婚した節子（ふみか）がいる。先の、愛人宅の場からは、数年後のことになる。節子のはたきをかけている。

節子 あんた、どこへ行ってましたのや。

素石 どこへて、出かける前に言ったやないか。丹波から、ぐるっと

回ってな・・・

節子 ほんとうに腹のたつ。

素石 久しぶりに家に帰った早々なんやというんや。ほら土産の岩魚

もあるで。

節子 いらんわ。そんなもの。

節子、素石の頭にはたきをかける。

素石 ふ、節子。おまえ、亭主に何をする。

節子 亭主。あんたがわたしの亭主やというんなら、あんたは眞紀子

の父親やな。

素石 決まっとるだろう。眞紀子はわしの娘や。

節子 その、あんたの娘がな、眞紀子がな・・・

素石 眞紀子が、眞紀子がどうしたんや。

節子、はたきをかけつつける。

素石 眞紀子がごないしたんや。具合でも悪うなったんか。なあ、節

子。・・・なにがなにやら・・・、なあ、どうしたんや。節子、

節子、節子ちゃん。

節子 自分で見て来い。

素石、隣の部屋へ。素石戻って来て。

素石 ・・・・どうしたことや・・・

節子 三日ほど前にな、高熱が出ましてな、もう狂ったみたいに頭を
たたみにぶつけますのや。半日、泣き叫んでましたわ。

素石 い、医者へは。

節子 へえ。おかげさんで。注射を打ってくれはりました。おとなし

ゆうなりましたやろ。

・ ・ ・

素石
節子

脳性麻痺というんやそうです。

節子はたきをかけている。

素石

・ ・ ・ なんか、節子。おまえ、こんなときに掃除なんかせんか
て ・ ・ ・

節子

これぐらいは、さしておくれやす。

素石

・ ・ ・ それで、それでどうなるんや ・ ・ ・

節子

なにがです。

素石

これからや、これから ・ ・ ・

節子

ずっとあのまんま。

素石

・ ・ ・

節子

・ ・ ・ あんたのせいだす。

素石

え。

節子

あんたのせいだす。あんたが、水商売のあばずれ女に熱を上げて、うつつをぬかしてやはるからあの子がこんな目にあうのや

素石

おへんか。

節子

おまえ ・ ・ ・

素石

丹波の岩魚は五尺もあって、さぞかし釣り応えがありましたや
ろな。おまけに岩魚に名前までついとるんですな。

素石

な、なんのことや。

節子

秋本紗恵とかいうあばずれ岩魚。

素石

・ ・ ・

節子

なにが丹波で岩魚の大物狙いや。家のやりくりは火の車、子ども
もの世話まで全部押し付けて、あんたは、遊びほうけてたんで
すやろ。前の奥さんに心を残してるだけじゃなくて、そんな
女もいたなんて。

素石

わしかてな、帰ってきたいから帰って来てるんや。

節子

はん。お山が好きなんですやろ。

素石

そや。けどな、わしは ・ ・ ・

節子

山や釣り狂いなら、女狂いよりはましだと思っていたのに。

素石

そやない、そやないんや。節子。

節子

あんたのせいや。あんたの。あの子は一生ノータリンと言われる。さあ、釣りでも山でも岩魚んところでも、どこへなりいったらいい。

素石呆然とする。

11

廃村の一夜

廃村の廃屋である。素石がいる。

素石

今、わたしは一人、鈴鹿の山奥に来ている。陸の孤島、秘境と言われ、昭和38年に最後の家族が村を離れたことにより、無人の廃屋だけが残された、かつて村だった場所だ。朽ち果てた廃屋に漂う人の気配、かつてここには人が住んでいた。人の思いのかけらが、散らばった本や、台所、柱の傷にしみこんでいる。目を閉じると人の声が聞こえてくるようだ。

かつての村人が幻のように現れる。魑魅魍魎の姿にも見える。素石が書いていた。

素石

「長い山道をたどって来て、一步ここに足を踏み入れると、タイムマシンにかかったように時代感覚が失せてしまって、うら哀しいほど昔なつかしい気分を引き込まれる。そして人間がないことによって、よけいのこと人間やその生活が感じられるのである。」

いつのまにか秋邨先生が通りかかる。素石思わず、呼びかける。

素石

先生。秋邨先生。

秋邨

おう素石。こんな廃村に何の用や。お前の来るところやないで。

素石

先生・・・、わたしは、しかし、どうしようもなく山に来たく

なります。

秋邨
素石

山を恋ゆれば山恋し、人を恋ゆれば……、山恋し、やな。
先生、先生は、年をとったら、山奥の溪流の岬に山荘を建て、
晴耕雨読の生活をしようではないか。いつもそういつていまし
たよね。先生は山のことをよく知っていて、山で生き抜く知識
もたくさんあったのに、そうなさらなかった。どうしてですか。
どうや、最近は釣れるか。

秋邨
素石

え。

教えてやったテンカラ毛鉤釣りは、ちっとは上達したか。

秋邨
素石

ええ。前に比べれば。

秋邨

それでも魚には負ける。釣れないことや釣り逃がすことの方が、
よほどある。

素石

それは、そうです。

秋邨

魚は食うことと子孫を残すことが本業。竿を振っている間も、
頭のどこかに借金のことや、それに子どもや嫁はんや愛人のこ
とがあつての片手間勝負。魚に勝てるわけがないわ。おまえだ
けのこといってるんやないで。

素石

どういふことですか。

秋邨

そや……、おまえ焼きイモ好きか。

素石

は？

秋邨

焼き芋だよ、あるやろ、イモ焼いた、こうサツマイモをやな……

素石

そりゃ知ってますよ、それくらい。

秋邨

そうか、お前でもわかるか。

素石

それで、焼き芋がどうしました？

秋邨

好きか。

素石

好きですよ……

秋邨

だったらいい。

素石

は？

秋邨

好きかどうか聞いたただけだ。深い意味はない。

素石

……

秋邨

だったら聞くな、と言ってるな。

素石

いや言ってますよ。

秋邨 いや言っている。お前はそういう男だ。

素石 なんですか。

秋邨 怒ったな。

素石 怒ってませんよ。

秋邨 怒ってる。

素石 ・ ・ ・

秋邨 ふてくされたな。まあ、いい。あやむらさき、ベニアカ、ベニ

アズマ、ベニ小町、ベニハヤト、パープルスイートロード、エ

レガントサマー・ ・ ・、はよ止めろや。

素石 ・ ・ ・ なんですか、それは。

秋邨 サツマイモの種類だよ。わしもだてに焼き芋の話をしたわけで

はないぞ。

素石 はい ・ ・ ・

秋邨 今、そこらに出回っている焼きイモをどう思う。

素石 はあ。

秋邨 どう思う？

素石 味が変わったというか ・ ・ ・

秋邨 そこだよ。落ち葉で焼かん焼きイモなど焼きイモではない。こ

の前、スーパーの前で売っている焼きイモを、狐や狸に食わせ

たら、ペツと吐き出しおった。 ・ ・ ・ が ・ ・ ・ 結局 ・ ・ ・ 食ろう

た。そんなもんや。すぐに慣れてしまう。流動転変は日常茶飯

事。いずれ馴らされ、あたりまえになる。

かつての村人たちが、秋邨の話をいつの間にか聞いている。

秋邨 この村ではどやった？ 一人の重みは山にも匹敵した。その

かわり、医者も産婆もおらんし、電気もガスも水道もない。こ

こに住んでいる限り、不便さは永久につきまとう。なあ、文明

の発達いうんは、ちょうどいいところで止まるというのは難しい

のかもしれない。わしはええ処で死んだのかもしれない。

素石 先生。

秋邨 ここから何が見える。

素石 え。

秋邨 街の明かりや。見えるか。

素石 ・ ・ ・ 見えます。

秋邨 この村の人かて、あの明かりを見て、この山を下りたんやろ。

村人たち、彼方の明かりを見た。

秋邨 こっちから見たら、あそこに幸せがあると思うかもしれない。

素石 人の幸せいうんは、どこにあるんでしょう。

秋邨 そんなことは知らん。

素石 しかし、秋邨先生。わたしは、どうしようもなくどこかに落ちて着きたい、だけれどもその場所がどこにあるのか分かりません。どこかにあるってもんじゃないわなあ。

え。

秋邨 幸せかどうかなど決めることでもない。おまえには、妻も子も愛人も、それから川もあるやないか。贅沢なこっちや。ああ、もう少し生きとったらよかったわ。

秋邨の言葉を聞いたか聞かないか、素石書き始めた。

素石 「急激で乱雑な国土の改変は、村から人間を奪い取ってしまったが、人間の心から村を奪い取ることにはできないだろう。」

村人、秋邨、去っていく。

素石 「廃村にいながら、そんなことを考えた夜、わたしは眠れなかった。家には脳性麻痺の子どもがいる。重症である。どうにもならない重症である。その娘と、その面倒を見ている八十になる母、そして長く実家に帰ったままの妻とこの廃屋とが、妙にこの夜の心象と結びついてしまって、次から次へと胸のうずく映像になって、疲れた脳裏を去来してやまなかった。」

女たちが狐の面をかぶって踊っている。やがてダムの中に沈む村の住人、ハナとキク、素石の妻、そして紗恵もいる。

素石の脳裏に去来する映像。素石、やがて呼びかけた。

素石

紗恵 ・ ・ ・

紗恵

へえ、どうしたんですか。急に電報なんかよこして呼び出して。はい、参りましたわよ。五尺の岩魚が。

素石

・
・
・

紗恵

どうしたんですか。

素石

長いこと、おまえのおかげで好き放題をさせてもらってたな。六年前におまえにおうて、無欲なお前に支えられて、いい思い出をたくさんつくらせてもらうたけれど、おまえのおかげで、何か生きていける芯のようなものも見つかったけれど、好意に甘えっぱなしでなにもしてやれなかった。礼のいいようもない。いったい、わたしに何をおっしゃりたいの・・・
おまえのことは、一生、忘れはせん。ただ、ただしばらくの間、しばらくの間、わしから離れてくれ。

紗恵

素石

しばらくの間。

紗恵

楽しかったわ。

素石

紗恵。

紗恵

いつか、こういう時が来ると思っていましたけれど、意外に早く来ましたね。この六年。夢みたいな六年。

素石

そういうてくれるのか。

紗恵

でも、わたしの方から望んだことだけれど、あなたの放浪も気ままなら、いきなりこういうことを切り出すのも、わがままな人。

素石

そうや。わしは、そうや。

紗恵

そういう人を好きになったんだものね、わたし。

素石

紗恵、わしができることはなんでも・・・

紗恵

なにもおっしゃらないで。わたしね、水商売から足を洗ったら花屋さんになりたいと思ってるの。

素石

花屋か。美しい商売やな。

紗恵

いいでしょう。和洋取り混ぜて四季おりおりの花を店に飾るの。今に、花よ、緑よという日がきつと来ると思うの。

素石

そうか。そうやろなあ。

紗恵

だから、ね、わたしのことはいいから、あなたはあなたのお好

きなことを、ね。

素石

紗恵。

素石、書き始めた。紗恵が見ている。

素石

「突如、右手の山側から妙なものが飛んで来た。妙なものは日陰の藪だたみからとんできた。ヒューといったか、チーッといったか。そのどちらともつかぬ音を立てて、下生えの藪の中からゆるい放物線を描いてとびかかってきたのは、一見したところ、ビール瓶のような格好をした蛇であった。」

紗恵

へえ、そんなもんがいますか。

素石

ああ、おるんや。

素石

「その姿をまじまじと見た時、わたしは本当に息をのんだ。なんともけったいな、いやに太短い、しかもまがう方ないへびなのである。だが、それはまちががなくへびだとしても、へびにしてはあんまり短すぎるし、その割には太すぎた。」

紗恵

へえ。もっと聞かせて。

素石

「自分の目を疑うというのは、こんな場合のことだろうと思う。もちろんそんなものに出くわしたのは初めてである。(ますます興がのり)「ツチノコは、太短い体をきゅっと縮めて、尺取り虫のような逆C字型になると、尾の部分を支点にして、一直線に宙を飛んだ。その跳躍距離約2メートル。まるでむささびのよう、さらに体を横に広げて、ツチノコは飛翔した。」

紗恵、素石を見ている。

紗恵

ツチノコ、いつまでも探し続けられるといいですね。

暗転。

12

ノータリクラブ例会、ツチノコブームの中

いつかの、とある山村の旅館。膳が並べられての宴席である。ノータリンクラブの例会。岩魚山人、河原岳童、松岡枕流。旅館の娘、キクが聞いている。

キク

大したもんだ。10年前に初めて話を聞いた時は、ほんもののノータリンの集まりだと思ったけども、朝日新聞の連載小説のモデルになるなんて、はあ、大したもんだ。

岳童

キクちゃん、ほんもののノータリンの集まりはないでしょう。

山人

い、いや、むしろ立派なノータリンや。

キク

いもの。それに『Z』の朝の連続テレビ小説になることも決まったなんて。ほんとにびっくり。

枕流

そうやで。その小説「すべってころんで」のツチノコ探検隊のモデルが、わし松岡枕流や。

岳童

枕流さんだけじゃないでしょう。

山人

わ、わしもや。

キク

山本先生が、テレビでツチノコ対談をしたというのは本当？

岳童

ええ。

キク

はあ、おったまげた。

枕流

神戸ではツチノコパン、岡山ではツチノコまんじゅうが売り出されたそうや。

山人

ぎ、岐阜の東白川村には、ツチノコ館がオープンした。

岳童

なにより、このツチノコブームで良かったことは、日本全国からツチノコの情報が集まるようになったことです。

キク

へえ。そしたら、いよいよツチノコは捕まるんやろか。

三人

・
・
・

キク

ん？ どうしたん？

山人

そこが問題なんや。

枕流

賞金目当てで送られてくる情報も多いんや。

キク

賞金って、ああ、クラブで出しとる賞金。生け捕り、金10万円だったかしら。

枕流

そうやないんや。このブームとかで、その賞金のはねあがったんや。

キク へえ、いくらになったの？

山人 い、一千万や。

キク 一千万?! 宝くじの一等賞と一緒に。みなさん、お金持ちなんや。

岳童 違うんです。ノータリクラブで出している賞金じゃないんです。

枕流 どこぞの土建屋や。あいつら、ダンプやらブルドーザーやらで、ツチの棲んぐるかもしれない山を裸にしとるくせにや。賞金にひかれて、電波探知機やら麻酔銃やら持ち出して、ツチノコを捕まえようとする輩まで出てきたんじゃ。

山人 せ、戦争やないんや。ツ、ツチノコは、か、金には、か、かえられん、も、もんだ。

岳童 しかしです。ここのとこ何回もお話をしてきましたが、たしかに情報は集まって、ツチノコ発見の可能性が高くなったこともそれは確かなことじゃないですか。

枕流 ……そこらあたりのことやろな。今日のクラブの例会は。

漫溪と素石、それから、ハナがやってきた。

キク ああ、お帰りなさい。

岳童 山本さん、漫溪さんご苦労様でした。

素石 いや。ハナさん、ご苦労さんでしたな。

ハナ いや、お二人様こそありがとうございます。村の皆にいろいろとお話をしていただいてな。みな、ツチノコ先生が来てくれた、山のはなしやら街のはなしやらしてくれたと喜んでりました。

素石 なんの役にもたたんことで。

ハナ いんや。この村から出て暮らすんは初めての人が多いんよ。皆、不安やから。喜んでったんよ。

キク それじゃ、いよいよ決まったんやな。わたしたちが、生まれ育ったこの村を出て行くんが。

皆、キクの言葉を聞いた。

枕流

長いこと、村の人たちみんなでお話しされて来て、そうですか、決まりましたか。ご苦労様でした。キクちゃん、東京にもいかんと、ここにおったのになあ。

キク

はい……。

ハナ

ここに住んどったものは皆そうです。ここにおりたかった。ほんでも、全戸離村ちゅうことで、今年中にはな。泣いても笑ってもどうにもならんことですわ。

ハナが外を眺める。

ハナ

あそこの木の大きゅうのもダムができたら沈んでしまうんやな。

キク

木だけじゃない。村中全部。

ハナ

なあ、山本さん。今度わしが行くところには、電気を送る高压線が通っていて、鉄の塔が建つとるいうんです。

素石

そうですか。

ハナ

今度はな、わし、その鉄の塔に話しかけてみよう、思つとるんよ。

素石

え。

ハナ

悲しいことや面白かったこと今日一日あったことをな、話しかけるんよ。お父ちゃんが帰ってくるまでと思うてな。関西電力の27万ボルトの電気を送る線やから、この村を沈めて造ったダムでできる電気も送られとると思うんよ。この電気を喜んでくれる人がおると思うて、鉄の塔にな、話しかけてみよう、思うとるんよ。

キクが窓を開けた。皆、やがて消え行く村を、木を眺めた。

ハナ

……ほんでもな、スパンと切れるもんですかのう。スパンと大根を包丁でスパンと二つにするみたいに。別れられるもんですかのう。どうにもならん思いうのは、どうにもならんでも、どうにもならん思いのままなんじゃないんですかのう。

ハナ、皆に一礼して去った。キクも追った。

漫溪

あそこの山におるかもしれん、ツチノコも沈んでまうんやな。

素石が言った。

素石

逃げるんや。

漫溪

・・・素石はん。

素石

ツチノコ、逃げる逃げるんや。もうじきその辺りは全部沈んでしまふんやで。逃げる。それで誰にもなにも捕まるな。川のかな、上流や、どこまでもどこまでも上流へ行くんやぞ。わしらも、もう追いかけん。逃げる。どこまでも逃げるんや。捕まったらあかんで。

皆も続いた。

山人

ツチノコー、に、逃げるんや。

漫溪

うん。たっしやでいろよ。

枕流

ありがとな。

岳童

がんばれよ。面白かったぞ。

素石

・・・逃げる、逃げるよ、ツチノコ。

やがて、暗転。

13
死

素石の家。節子と漫溪がいる。

漫溪

そうですね。明日から入院でっか。

節子

もうお医者さんも、おなかの辺りを少し触っただけで、今からでも入院をといわはりました。

漫溪

医者嫌いでしたからな。

節子 ええ。何度言うても、なかなか。
漫溪 そうでした。

節子 近頃は、ずっと眞紀子と添い寝をしてくれていましたけど、それも、夜中に胸が苦しくなるから、眞紀子に悪いといいましてな。

漫溪 これ、持って来たんやけど。岩魚ですわ。

節子 岩魚……。

節子、しばらく岩魚を見た。

漫溪 ……ああ、食べはるのは、無理かもしれんけど、匂いが恋しいんやないかと思ひましてな。山や川に行けなくなって、めっきり気落ちしてはりましたから。

節子 ……

漫溪 やっぱり、持って帰りますわ。

節子 いいえ、頂きます。天ぷらにして出さしてもらいます。お医者

漫溪 さんもなんでも好きにさせてやりなさい、いうてますし。

漫溪 ……そうですね。

節子 このところ口に出きるんはアイスクャンディくらいですけれど。…漫溪はん。

漫溪 はい。

節子 わたしにとっては、我慢できないことも多い人やった。

漫溪 奥さん、よう戻りはりましたなあ。

節子 漫溪さんにとって、山本素石はどんな人やったんやろか。

漫溪 え。…会えてよかったですわ。

節子 え。

漫溪 あんな人ひとりもいませんわ。あの人に会わんなら、わしの人生違うものになっていたかもしれまへん。自分の人生から山本さん引いたらつまらん思うてます。

節子 そうですか。それは……。ツチノコはほんまにおりますか。

漫溪 え。

節子 ……もしかすると、あの人はツチノコ探すんをやめたくなかったん違いますやろか。…どこかに幻みたいなへビがいて、

漫溪

それは見つからないんやけども、ずっとそれを追いかけていた
かった……。そう思うんです。

そうかもしれないな。

節子

わたしは……。ツチノコを捕まえてほしかった。捕まえてこ
こに帰って来て……。ツチノコが本当にいてほしいと一番思
っていたのは、わたしかもしれません……。

漫溪

素石さん、いうてはりましたわ。

節子

なんでしょう。

漫溪

「見つけたらあかんけど見つけるんや。見つかったらあかんけ
ど、いるんや。」って。

節子、深々と頭を下げた。漫溪も。やがて漫溪去る。節子、

素石に声をかけた。

節子

なあ、あんた。漫溪さんが岩魚を持って来てくれましたよ。
天ぷらにしますよ。なあ、あんた。

節子も行った。暗闇の中に素石がいた。

素石

節子、節子か。

返事はない。

素石

なんや、懐かしい匂いがするなあ。そうや、川や川の匂いや。

節子

節子、節子。

(遠くから) はい。

素石

なあ、ここから川が見えるか、川を見たいんや。

節子

(遠くから) はい、もう少しであがりますよってに、まっ
くれやす。

素石、立ち上がり、遠く川を見つめる。素石の周りになつ

かし山々や溪谷、川が立ち上がる。素石の目に、幻のへビ

が映る。

素石

なんや。おまえ、やっぱり生きとったのか。ああ、よかったな
あ。さあ、誰かが……。捕まえに来よううちに……。はよ

う・・・はよう逃げろ、逃げるんや。・・・はよう・・・。はよ
う。

素石倒れる。ツチノコは川上へ飛翔した。

了

※本作品は、山本素石の著作権管理者である山本信二氏から、
引用について応諾を受けて書かれています。

○主な引用・参考文献

すべて山本素石著作

「逃げろツチノコ」(二見書房)

「釣山河」(二見書房)

「遥かなる山釣り」(産報)

「釣影」(アテネ書房)

「溪流物語」(朔風社)

「山棲まんだら」(クロスロード)

「溪流山河 素石釣りに対談」(立風書房)

○上演記録

作…丸尾聡／演出…喜一郎／照明・舞台監督…小関英勇／音楽…山下やすし
／美術…大田創／美術補・宣伝美術…青木祐輔／演出助手…中吉孝志／
舞台監督助手…中原和樹／音響…吉岡英利子／衣裳…中村洋子

【会場】スタジオマリア(世田谷区若林)

【日程】2009年9月3日～10日(全10ステージ)

【出演】

鈴木一功(山本素石) 石山海(木野漫溪) 狩野謙(松岡枕流)
鶴忠博(岩魚山人) 竹石悟郎(河原岳童) 井上加奈子(紗恵)
松坂わかこ(節子) 坂田純子(ハナ) 水野さやか(キク)
中西良太(秋邨先生)